

らいび 創 REATOR

NO.44
2009年3月
研究広報誌

CONTENTS

学びの質の高まりをめざして

- 来年度の展望・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
- 今年度の取り組みを振り返って・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
- 研究会を終えて・・3
- 学習紹介：「文章題での算数的活動を通して」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
- 学習紹介：「ふぞくっ子 あきのおもてなし」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
- 学習紹介：「ICT de 自然の“文脈”をさぐる！」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
- 学習紹介：「こんな“評価”に挑戦してみませんか？」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
- コラム：「池島史郎さんに聞く“紀州雛”」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

副校長，2年目に思うこと

和歌山大学教育学部附属小学校 副校長 北原 博男



本年度も、「複式教育研究会（6月）」「国語力向上モデル事業研究会（6月）」「夏季教科別研修会（7月）」「教育研究発表会（11月）」「ICT活用授業研究会（1月）」と合わせて5回の研究会を行い、全国各地から昨年度を上回る先生方のご参加をいただき有意義な会を開催できましたこと、深く感謝申し上げます。

本校ではここ2年間、研究主題を「学びの質の高まりをめざして」と設定し、子どもの学びの質を高めるための授業改革・カリキュラム改革・学校改革に取り組んできました。研究を進めるにあたっては、東京大学大学院教授 佐藤学先生の著書や雑誌に書かれたものを読み合い、私たちに解釈し共通理解しながら実践研究を進めて参りました。

本年度は、佐藤先生に2回お越しいただき、「新学習指導要領を超えて」～質の高い学びを創る授業改革への挑戦～という演題で、ご講演いただきました。その内容については今春出版する本の序章に「教育改革のデザイン」としてまとめていただきました。本校のこれまでの実践と合わせてお読みいただければ幸いです。

私たちの研究もようやく、「背伸びとジャンプ」できる学びをめざすためのグループやペア学習の導入、ICT機器の活用、学習形態の工夫などが日常的になされるようになってきました。研究会で佐藤先生に、「教室に入りやすくなったね。」とお褒めの言葉をいただけたことは、私たちの励みになりました。

来年度も引き続き、「質の高い学び」をめざしていきます。そのための課題がいくつか見えてきました。

- ①本校の勤務年数2年以下という教員が、学級担任の4割を超えています。大変実直に取り組んでいますが、教科の専門性や教材の質という点では、まだまだ足りないところも感じます。一人ひとりが、先進的な取り組みをしている研究会等に参加し、学んだことを日頃の実践に生かすことで、実践の質を高めていきたいと思えます。また、個々が得た情報を共通理解する場を設け、全体のレベルアップをより図りたいと思えます。
- ②昨年度に比べ、学校全体が落ち着いてきた裏には、特別支援教育の体制や考え方が浸透してきたことが大きいと思っています。学習面や生活面で気になる子どもを、担任だけでなく学校全体で連携して指導していくことが大切だと思います。授業におけるTT指導や個別の指導はもちろんですが、休憩時間に子どもがリソースルーム「たんぼぼ教室」に行ってちょっとリフレッシュするというのも、子どもの心の安定につながったと思います。子どもたちの人間関係や心の悩みをより敏感に捉えられるよう取り組んでいきたいと思えます。また、生活面や学習面でよい習慣をしっかりと身につけさせるように、きめ細かい指導を大切にしていきたいと思えます。
- ③附属中学校との間で、昨年度はお互いの授業を参観する中で、学習する子どもの姿を見てきました。来年度は一步進んで、合同の授業研究を考えています。小中連携の中で、どう協力して子どもを育てていけばいいのかを追求したいと思っています。

最後に、このようないくつかの課題に取り組んでいくことを通して、落ち着いた雰囲気の中で活気ある学校を創っていきたくと思っています。

学びの質の高まりをめざして

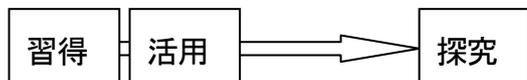
研究主任 志場 俊之



新学習指導要領とかかわって

新学習指導要領では、確かな学力を子どもに身につけさせるために、「習得」「活用」「探究」という3つの学習形態が示されている。

知識・技能を「習得」し、それを「活用」することによって思考力・判断力・表現力を育てること、

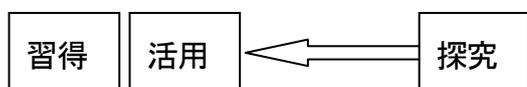


また、それらの能力を利用して疑問点を明らかにしようとする「探究」活動を行う。これが新学習指導要領に示されている一般的な学習の流れと考える。

学習が「習得」から始まっているのは、知識や技能があってはじめて活用できる内容も多いからである。ただ、その流れでは、知識や技能は身につくものの、子どもが受身になる可能性が高い。教師が与えることから学習を始める場合が多いからである。しかも、それぞれの過程は分断されたステージ的な学習になってしまう。

これが学びの1つの方向であるとするば、学びにはもう1つの方向があると考えている。

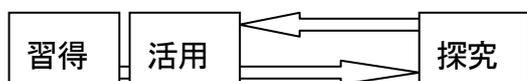
本校では、学びのもう1つの方向の研究を進めてきた。



本校で取り組んできた研究では、「習得」「活用」「探究」とステップアップしていくのではなく、「探究」活動を行う中で、必要に応じて「習得」「活用」活動がなされるといった形式をとってきた。

子どもが主体的に学ぶことを大切にするために、「探究」活動により、子どもに「なぜだろう」という関心や「面白そうだ」という意欲、課題意識をもたせてきたのである。主体的に「探究」する中では、必要に応じて子どもは自ら知識や技能を獲得しようとしている。また、協同的な学びにおいて、理解し合うために相手に説明したり、調べたことをまとめたりしながら、仲間と納得するまで議論している。その過程では思考・判断・表現を駆使しながら、主体的な能力が育っていった。その力が探究活動をさらに活性化していったのである。

「探究」型は本校が継続して取り組んでいるプロジェクト型カリキュラムにおいて可能となる。「習得」から始まる学びはある種、プログラムされた教師主導の学びの形態といえる。



しかし、学びのすべてを「探究」から始まるプロジェクト型カリキュラムで行うのではなく、時には、知識や技能をしっかり身につける「習得」も大切にされなければならない。

本校では、「探究」型を軸に据え、2つの方向からの学びを併用しながら子どもの確かな学力を保障しようとしているのである。

質的な高まりを目指すために

ICTを活用した教室環境の整備も進んでいる。しっかりと聞き合うかわりも定着してきた。より子どもたちが主体的に学ぶために、小グループによる活動も活発に取り入れている。

学びの質の高さは、何も学んでいる内容だけを指すのではない。学びを支える要素も大きく関係しているからである。学んでいる教室環境や学びに向かう意欲や態度、学習形態の工夫など、子どもを取り巻く環境も大きく関係している。そういった意味でも、より学びを支える環境が整ってきていることをうれしく思う。

授業の捉え方も、ゆっくりとではあるが、教師側の観点に立つ「授業」から子ども側の観点に立つ「学び」の方向への転換が行われた。この3年間で着実にシフトされてきている。子どもの学びの姿に目を向け、ワークショップ型の協議会を行ったり、子どもが学び取ったことから授業のあり方を見つめ直したりしながら、授業改善を目指してきた。私たちが問題にしているのは、子どもの学びの姿である。

佐藤先生は、質の高い学びを支える要素として、次の3点を挙げている。

- ・ 内容の質(quality of content)
- ・ 活動の質(quality of learning)
- ・ 教師の質(quality of professional development)である。

どのようにすれば学びの質が高まるのかといった特効薬はない。子どもの学びの姿から、よりよい学びの姿を模索していくほかに方法はないのである。今後、内容の質を高める取り組みとして、対象・学習課題の精選を、活動の質を高める取り組みとして、対象へのアプローチの仕方・他者とのコミュニケーションのとり方・自己との向き合い方・グループでの協同的な学びの姿・一斉での話し合いの仕方を、教師の質を高める取り組みとして、カリキュラム・みとり・教材の見方や考え方・学習の見通しの持ち方・子どもの考えのつなぎ方などを意識していきたいと考えている。

第3回 ICT活用授業研究会を終えて… — その成果と課題から学ぶ —

ICT 研究部主任
中井 章博



今年で3回目となるICT活用授業研究会に、全国から約300名の先生方にご参会いただき開催できたこと、厚くお礼申し上げます。

また、昨年度に引き続き、木原俊行先生・堀田龍也先生・野中陽一先生・豊田充崇先生、そして新たに高幣泰男先生にご指導いただけたことに深く感謝しております。

さて、昨年度は全学級公開授業を行い、「ICTの普及」をテーマに提案してきた本研究会ですが、今回は「学びの質の高まりをめざしたICT活用」というテーマを掲げ、子どもの学びの質的な向上にICTがどのような効果をもたらすのか、ということについて提案させていただきました。

公開授業では、「子どもたちの思考を共有するために」「他の学校と交流するために」「コンテンツを使って思考を深化させるために」「比較の視点をもたせるために」など様々な活用をご覧いただけたかと思います。そして、どの学級においても、ICTは主役ではなく、子どもたちの「学び」を助けるツールとして活用されていたと思います。本校では全校的な普及を推し進めた結果、ICTは普段の授業においても透明化された形で、子どもたちの「学び」を支える存在となりました。そして、ICTの活用方法を議論するのではなく、それによって子どもたちの学びの質は高まったのか、ということを中心に据えた研究に変わってきたのです。

全体会では、講師先生方から貴重なご意見をいただき、以下のようなことが確認されました。

環境整備の重要性	プロジェクタ・実物投影機・マグネットスクリーンなどのICT機器を整備することにより、誰もが活用し始めると共に、授業改善を図ることができる。
組み合わせの重要性	提示するものと提示方法・板書とプロジェクタ提示・課題や発問とICTなどの組み合わせを吟味することによって授業改善を図ることができる。
公開することの重要性	研究内容を公開し続けることにより、授業の質的向上・子どもの学びの質的向上・研究内容の質的向上を図ることができる。

また、今後の研究に向けて、下記のような課題もいただきました。

学習指導要領との関連性の明示	習得・活用・探求の授業づくりとICT活用との関係性の明示や習得の学習におけるICT活用方法の公開も望まれる。
対象・自己・他者との対話とICT活用との関連性の明示	本校が定義する学び（対象・他者・自己との対話）がICT活用によってどのように深まるか、ということについての提案が望まれる。
一般的なICT機器活用での公開	ICT機器がオーバースペックに感じられるので、一般校が標準的に配備されていると思われる機器での授業公開が望まれる。

今後も、本研究会で得た課題とご参会いただきました先生方からのご意見を糧として、子どもたちの学びの質の高まりをめざしたICT活用授業についての研究を進めて参ります。先述のように、本校ではICT活用授業が日常化・一般化しております。ICT活用授業に関して、いつでもお問い合わせいただき、また、本校にお立ち寄りご覧いただければと思います。



全体会 I 「公開授業から学ぶ」

くらべ方を考えよう！（割合） 算数的活動を通して

算数科
5年A組担任
西村 文成



今回の学習指導要領の改訂では、算数的活動の充実を図ることが求められている。学習指導要領の中にも例が示された。算数的活動を積極的に取り入れることで、興味・関心を引き出す授業をしていきたい。

「くらべ方を考えよう」での算数的活動

「くらべ方を考えよう」のねらいは、「割合の意味について理解し、それを活用して問題を筋道立てて考え、解決する」である。文章を理解し、数式化していくことが中心の単元である。単に式を立てることができれば良いというのではなく、「割合」や「倍」などの言葉の意味をしっかりと理解していかなければならない。

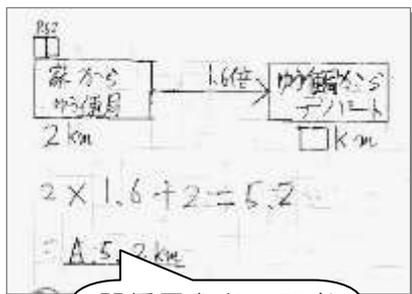
割合は、2つの量があるとき、一方が他方の何倍になっているかという関係を表す数である。2倍、3倍のような整数倍の意味は理解しやすいが、1.2倍、0.8倍のように小数倍になるとわかりにくくなる。教科書では「ある量をもとにして、くらべる量をもとにする量の何倍にあたるかを表した数を割合という」と説明している。つまり、割合は、もとにする量を1とみたときのくらべる量の大きさを表す数ということである。

問題（割合を使って）

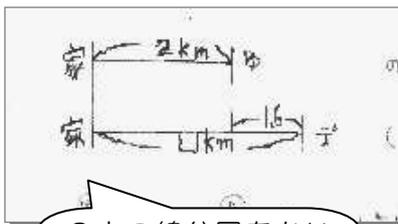
家から郵便局までの道のりは2 km あり、郵便局からデパートまでの道のりはその1.6倍あります。家から郵便局を通過してデパートまで行くとすると、道のりは何 km ありますか。

- ① もとにする量を間違えずにとらえること
- ② もとにする量を1と考えること

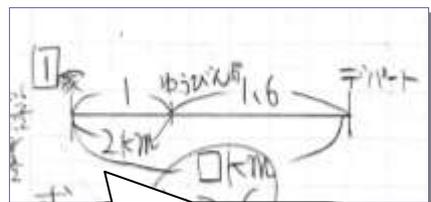
この2つをしっかりとらえさせなければならない。そのために、線分図や関係図などの図に表して考えさせた



関係図をかいて考える。言葉と数量を使って表す



2本の線分図をかいて考える。数量の大小について考えている。



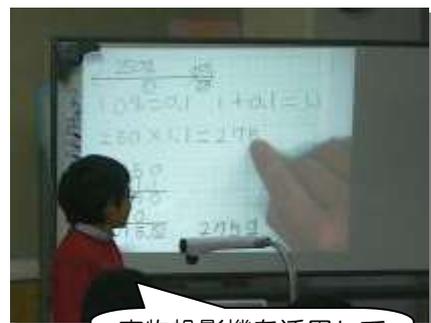
1本の線分図。問題をきちんとつかんでいないとかけない。

り、友達によくわかるように説明させたりした。「小数のかけ算・わり算」を学習したときに、関係図をかくことをすでに学んでいた

ので、子どもたちにとって、関係図がかきやすかったようであった。

しかし、関係図ではどのくらいの量なのかがわかりにくい面がある。もとにする量を1としてとらえ、くらべる量が1より大きくなるのか、小さくなるのかがわかるためには、線分図がとらえやすい。つまり、文章を図に表すという面では、関係図の方がわかりやすいが、数量をとらえるためには線分図の方がよりわかりやすくなる。子どものかきやすい図をかかせるが、線分図を全体場で紹介することにより、視覚的なわかりやすさを伝えた。そんな中、2本の線分図で表す児童がいて、紹介したところ「この線分図がわかりやすい」という意見もでた。もとにする量とくらべる量を2本の線分図で表すことは、1本の線分図で表すよりもかきやすいのではないかと思われる。事実、何名かの子どもがその後、2本の線分図をかいて考えるようになった。

割合を使った問題では、関係図や線分図にかいて考え、説明しながら問題を解決していった。ある児童から「この問題は線分図の方がわかりやすいね」という発言が出た。図にかいて考え、説明するという算数的活動を通して、問題に応じて、どんな図がわかりやすいかを考えた場面である。



実物投影機を活用してみんなに説明する

「ふぞくっ子 あきのおもてなし」 ～ “和み” 大作戦から広がるコミュニケーション～

生活科
1年A組
三上祐佳里



「附属っ子コミュニケーション “和み” 大作戦」

本年度、生活科では「附属っ子コミュニケーション “和み” 大作戦」と名付けたカリキュラムに、年間を通して取り組んでいます。隔週1時間で、お茶の立て方や、お花の生け方、お正月のお箸袋の準備など、「和」の生活習慣や日本の季節感を感じることでできる活動を中心に行っています。

城北小学校との交流

1年A組では、2学期に入り、本校に隣接する城北小学校との交流を始めました。本校の校区は公立校より広く、いろいろな地域から子どもたちが通ってきます。さまざまな地域の子どもたちが関わり合える反面、学校周辺の地域との交流は希薄になりがちです。城北小学校と交流することで、学校周辺の地域と関わり、学校周辺の様子をよく知らせたいと考えました。城北小学校も1学年1クラス、20人の少人数であるため、本校と交流することを望んでくれました。交流するにあたって、いつも同じ城北小学校の子どもと関わるように、また少人数で、密度の濃い関わりができるようにグループを作りました。



みんなで一緒に遊ぶことから、交流が始まりました。

近くの公園などで何度か交流するうちに、子どもたちの中から、「(城北小学校の子に) 附属小学校に来てほしい。」という声がかかるようになりました。そこで、教師から『おもてなし』という言葉の提示し、城北小学校の1年生をご招待する計画を立てました。

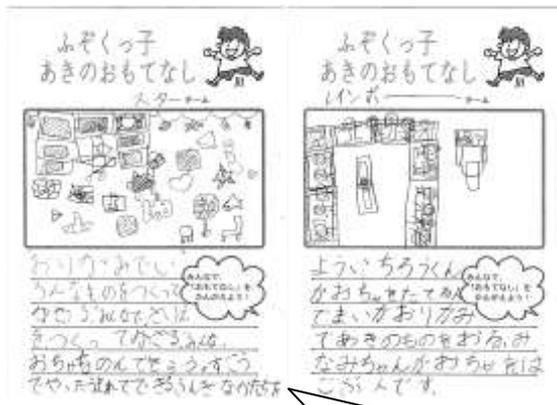
『おもてなし』という言葉から、1年生の子どもたちは、「人をよぶ」「お茶を出す」「お菓子を出す」「ちょっとスペシャル」というイメージを出しました。「ちょっとスペシャル」な『おもてなし』を意識して、それぞれのグループが計画を立てました。

“和み” 大作戦から広がるコミュニケーション

「ふぞくっ子 あきのおもてなし」は、子どもたちが思いや願いを大切にしながら活動を作っていく単元として、「附属っ子コミュニケーション “和み” 大作戦」と並行して取り組みました。生活している地域が違うため、共通の友達や行事の経験が少ない本校の子どもたちが、初めて『おもてなし』の計画を話し合うときには、それぞれ持っている活動のイメージが違うので、バラバラの視点で意見を言い合っていました。しかし、何回か話し合いを重ねていくうちに、「“和み” 大作戦」で経験したことを中心に話し合いが進むようになっていきました。

「附属っ子コミュニケーション “和み” 大作戦」は、子どもたちの実態に合わせながらも、教師の側から、ある程度のプログラムを提示し、子どもたちの活動を進めていくカリキュラムです。このカリキュラムでの共通の経験を中心に、徐々にお互いの視点が定まり、話し合いがしやすくなったのです。また、共通の経験を元にして相手の意見を聞くことで、さらに自分の考えを広げ、グループでの計画のアイデアを出すこともできていました。

しっかりとしたカリキュラムを生活科の柱に置くことで、子どもたちは、より自分たちの思いや願いを実現する手段を身につけることができ、子どもたちのコミュニケーションが広がっていきます。



それぞれのグループの計画表。どんな場にするのか、イメージしてかいています。役割分担ができていているグループもあります。



「見てもらえると嬉しいよ。」
「ここにいたら、お茶出すのじゃまになるよん。」
「おもてなし当日。それぞれのグループで相談しながら、飾り付けをしています。」

ICT de 自然の“文脈”をさぐる！

— めざせ！お茶の“水”博士「あわの正体をさぐれ！」の実践より —

理科
4年C組担任
中井 章博



図1 前時の実験

本実践の課題は、前時の実験(図1)において生まれてきた疑問から「水をあたためて沸騰したときのあわの正体をさぐる」というものであった。そして、あわの正体を「空気」であると捉えている子が非常に多く、「水蒸気」と捉える子はクラスの3分の1以下であった。さらには、このあわを「熱」が水にのりうつつたものと考えた子もいた。子どもたちにとって一番の疑問を本時の課題にすえることによって、自然の“文脈”(事物・現象の筋道や背景)をさぐる学びが構築できると考えた。そこでの、ICT

の効果的な活用方法と具体的な場面を紹介する。

【ICT de 課題提示】(図2)

子どもたちの実験の様子をデジカメで撮影しておき、提示する。本時の課題を明確につかませると共に、学びの対象(あわ)を子どもたちの思考を表出したイメージ図(図3)と比較しながら見ることにより、子どもと学びの対象との距離を近づける。



図2 課題提示

【ICT de 思考の共有】(図4)

一人一人が考えたイメージ図を共有し、様々な考えに触れることにより、考えの幅をひろげると共に、問題意識を強化する。



図4 思考の共有

【ICT de 思考の深化】(図5)

前時の実験(沸騰している様子)をデジタルビデオで撮影しておき、超スロー再生することによって新たな気づきが…「炎の当たる部分からよくあわが生まれるよ。」「あわは丸じゃなく、ブーメランみたい。」「一瞬にしてあわがうまれるね。」「あ、沸騰石がはねる瞬間にあわが生まれている。」現象のスピードを変えて提示することにより、実体験で得たことにさらなる意味づけを行うことができ、思考を深めることができる。



図5 思考の深化



図3 イメージ図

【ICT de 拡大提示】(図6)

子どもたちにとって危険な実験は、教師の演示実験により示すことがある。実物投影機とプロジェクタで拡大提示することにより、突沸などのリスクを負うことなく、どの席からも細かい部分まで観察できる。「あ、ポリ袋がパンパンにふくらんできた。」「袋がくもってるよ。」「熱するのをやめると、袋がしぼんだよ。」「あれ？水がたまってる。」この演示実験により、あわの正体は空気ではなく、水がヘンシンした水蒸気であることを確認する。



図6 演示実験を拡大提示

【ICT de 思考の更新】(図7)

新たに得た事実をもとに、グループでイメージ図を更新。デジタルペン授業支援システムでリアルタイムに共有しながら行うことにより、個人の思考やグループの学び合いだけでなく、同時に学級全体の学び合いも促し、全体としての学びの質を高める。



図7 イメージを更新

このように、ICTを効果的に活用することにより、自然の“文脈”をさぐる学びが構築できる。

こんな“評価”に挑戦してみませんか？ ～子どもたちがつくる評価チェック表～

そうごう
6年A組担任
山中 昭岳



総合的な学習の時間（本校では「そうごう」とよび、以下そうごうとする）において、いつも苦しめられることがあります。それは、評価です。子どもたち一人一人が自ら見出した課題をもち、学習を進めていく中で、たった一人の教師がそれを評価するのは難しいです。そこで、私は子どもたちに託してみました。その評価作成までの流れと活用事例についてご紹介します。

6Aは、この一年間、環境教育をそうごうの核として進めてきました。そして、環境教育にとってもっとも重要な体験活動を“ほんまもん”体験とよび、自然にどっぷりと浸り、自然のよさ、厳しさを五感で感じとる活動を行ってきました。これらの活動が楽しいだけで終わりになるのではなく、様々な気づきを生み出し、課題へと発展させ、学び続ける子どもへと変容させる必要があります。そのためには、自分がどのように成長しているのかが子どもたちに見える形で表現されなければなりません。本稿で紹介する“評価”は、毎時間の自らの成長と体験による新たな気づきを促すものとなりました。

①ゴールの設定：子どもたち自らがなりたい自分を想像する ～身につけたい力は？～



学年はじめに、この一年間でどんな力を自分たちは身につけたいのか話し合う。そのとき付箋を使い、とにかく思いつくすべてを書き出し、前に貼り付けていく。どんな内容もまずは受け入れ、同じ内容のものをグループ化しながら整理していく。

子どもたち自らが整理したこの一年間で身につけたい力を背面に掲示し、常に見られるようにしておく。



②ゴール達成への具体化：子どもたち自らが単元を知り、評価規準表をつくる

	A	B	C
加算	今までできなかったことに挑戦できる。	思ったことを最後まで実行できる。	いろいろなことに挑戦できる。
乗算	人の意見をきいて、自分の意見と比べることができる。	人の意見をきいて理解をおかろうとする。	自分の考えをつくらることができる。
分算	友だちの意見を評価できる。	友だちの意見にアイデアをもったりする。	友だちの言葉に感嘆、つけたし、反論できる。
減算	オラス全員に自分の意見や考えをわかってもらえる。	資料や写真などを通してわかりやすく相手に伝えることができる。	オラス全員が発表できる。
掛け	一つの機にわかってみんなでのりこえることができる。	お互いにアドバイスし合い、確認することができる。	友だちの手助けを頼めることができる。
割算	人の意見を認め、自分をみつめなおすことができる。	人の提案したことを自分の言葉で言い直すことができる。	全員がわかるようにする。
平方	前のことを今と比較することができる。	前に学んだことからつなげることができる。	一度習得されたことをもう一度習得されない。
立方	学ぶことを楽しいと思うことができる（褒められる）。	他の授業からつなげることができる。	わからないことには、みんなと考える解決しようとする。
平方根	自然のことをよく知り、自然のためにできることをする。	生き物たちの気持ちになることができる。	玉葱で体験し、自然とふれあうことができる。
立方根	“ほんまもん”をwebのたのめになくすることができる。	エコをみんなにひろめることができる。	残食り、ゴミをへらし、落とし物をなくす。
平方根	みんなの役に立つひらめきを出すことができる。	1つのこととあつらえられたことを考えることができる。	自分の機やグループの機を時間で決めることができる。
立方根	どんな仕事をしてもしばしばおんぼろることができる。	いろいろなところへ行って調べる。	時間を守り、せいぜい活動する。

単元の概要を知るとともに、単元目標を自分たちで設定し、そこから身につけたい力を①に沿って考えていく。左側の黒の枠の部分は①で設定した身につけたい力であり、それぞれ右側に具体的な評価規準が書かれてある。この表をもとに自らがすでに達成できているところ、逆にまだ達成できていないところが明確になり、このことをもとに学習を進める。

評価シートをもとに、自分の成長したところ、また活動内容を友だちやグループの中で伝え合い、相互評価を行う。伝え合う中で、新たな課題を見出し、次への活動につなげる。

『里山というものは生態系が存在し、山にたから、みんな生態系をつくる役割がある。』
『山で自然はどのように生きていくのか。』



③自己評価・相互評価：自己だけでなく、他者とのつながりを強める



“ほんまもん”体験。このとき、②の評価規準を意識しながら行う。活動後、評価シートに自己評価を記入しておく。

★課題として☆

年間を通して身につけたい力を12設定しており、どの単元においてもその12すべてを基準に考えていたため非常に評価する内容が多くなってしまいました。単元ごとに身につけたい力の軽重を考え、その上で全体のカリキュラムを通した評価づくりに来年度は挑戦したいと考えています。

池島 史郎さんに聞く “紀州雛”

社会科
4年B組 担任
谷口 佳都司



社会科の学習で、郷土の伝統工芸・工業を教材として取り上げることが多いと思います。紀州雛は、海南市「黒江地区」の伝統工芸品です。この紀州雛を製作しているのは、蒔絵師の池島史郎（いけじま しろ）さんです。紀州雛は、平成16年3月に「和歌山県郷土伝統工芸品」に指定されました。

池島さんは、伝統技術を継承し紀州雛宗家寺下の3代目を受け継ぎ、23年間製作されています。また、「平成16年度きのくに技能奨励賞」を受賞されました。

紀州雛製作について、池島さんにお話しして頂いたことをご紹介します。

絵付けについて

本漆を使って顔・服の模様等を筆で描いていきます。小さな雛は高さ3.6センチなので、繊細な技術と時間を要します。絵付けをするときに、手で持つ部分が限られてしまうためです。漆を乾燥させる工程では細心の注意を払っています。室温は20度前後を保ち、適度な湿度が必要になります。乾燥の仕方でも、漆塗料の色・ツヤの出方に違いが出てきます。紀州雛は男女一対なので、特に男雛・女雛二体の顔の色が丁度いいバランスでなくてはなりません。漆の乾燥が難しいのは、梅雨と冬の時期です。梅雨の時期は気温と湿度が高く、漆塗料が早く乾いてしまい色が濃くなったりツヤがなくなったりします。逆に、冬の時期は気温と湿度が低いため、部屋を暖めたり、木箱のフタを閉め、その上に水で湿らせた布を掛ける等、一定の湿度を保つ工夫をしています。

木地について

木地の原木には、含まれる油が少なく割れにくい「えごの木」を使っています。木地は、大分県の木地師さんが作っています。適度な堅さの木を選び、ろくろをひき、バイトで削って形を整えて作られます。刃を念入りに研いだバイトで削ることで、木地の表面が滑らかにきれいに仕上がり、色の塗りや絵付けの具合が非常に良くなります。

紀州雛の特徴・魅力とは

- ・すべて手作りであること。
- ・昔の衣装を簡素化した絵柄が特徴。
- ・全国でも数少ない、漆を使った人形であること。

お客さんに願うこと

紀州雛を買ったお客さんには、蛍光灯や日光が常時当たっている所を避けるようにして長く大事に使って頂けたらと思います。年月が経つと、いいツヤになり、絵付けした時に合わせた本来の色が出てきます。

主な作業工程

- [1]木を削り雛人形の形を作る〔大分県の木地師さん〕
- [2]下塗り・上塗り〔黒江の塗師さん〕
- [3]絵付け〔池島さん(蒔絵師)〕



紀州雛は、うるわし館(海南市)・百貨店・県物産観光センター・県外のいくつかの店等に出荷したり、黒江の何軒かの問屋さんで取り扱われているそうです。

池島さん御自身では、紀州雛のインターネット販売をしていません。「写真では判りにくいので、製品を実際に目で見てから買ってほしい。」という思いがあるからだそうです。

From Editors

梅の花が咲き、春が近づいてきています。

2008年度もあとわずかです。HPではカラーで紹介していますので、是非ご覧下さい。ご意見・ご感想をお寄せ下されば幸いです。

和歌山大学教育学部附属小学校

〒640-8137 和歌山市吹上1丁目4番1号

TEL (073) 422-6105

FAX (073) 436-6470

URL <http://www.aes.wakayama-u.ac.jp>

E-mail fuzoku@center.wakayama-u.ac.jp